Moodle を用いたブレンドラーニングの日本語聴解授業
ーアンケートとインタビュー調査からわかるベトナム人学習者の評価ー

チャン・ゴ・ニャ・チャン（ダナン大学外国語大学）

Japanese listening class with Blended Learning Method by using Moodle
-Vietnamese Students evaluation from survey and interview-

Tran Ngo Nha Trang, The University of Danang - University of Foreign Language Studies

要旨：本研究では、ベトナムの外語大学にて、聴解授業にブレンディッドラーニングを導入し、アンケート調査で学習者のブレンデッドラーニングに対する学習満足度を調べた。さらに、学習者の成績と Moodle での活動ログのデータから学習効果を分析したほか、フォローアップインタビューを通して、積極的に活動しなかったグループ及び積極的に活動したが成績の改善が見られなかったグループについてより深く探った。

キーワード：ブレンディッドラーニング、e-learning、Moodle、聴解授業、日本語教育、大学教育、ベトナム

1.　はじめに

90 年代からインターネットの普及と共に、e ラーニングが注目され始め世界に広まった。e ラーニングは学習場所・時間の柔軟性、学習履歴の管理、復習の容易さ、コストの削減などの利点（青木、2012）がある一方で、その限界や困難点も浮かび上がってきている。そこで、これらの短所について反省を重ねる中で、e ラーニングの長所をそのまま生かし、その短所を「対面授業」という形で補う教育・学習方法の必要性が認識され始めた。これが現在のブレンディッドラーニング（以下 BL）の起こりである（Macdonald, 2008）。

BL は「統合型学習」や「折衷学習」また「ハイブリッド型学習」とも呼ばれるが、どちらも「学習形態をブレンドする」という意味を持っている。すなわち、異なる学習メディアを融合・調合するということである（宮地，2006）。研究者によって、様々な BL の定義が述べられているが、本研究は Horn and Staker (2017）が定義した意味で扱うこととする。Horn and Staker (2017) では、「授業の少なくとも一部はオンラインで学び、学習の時間、場所、方法またはペースを生徒自身が管理し、一部は監督された従来の教室で学ぶ教育プログラムである。一つのコースまたは科目における各生徒の学習内容は、学習プログラムの全体に統合される」と定義されている。なお、本研究では、「オンラインでの学び」は e ラーニング、「従来の教室での学び」は対面授業と呼ぶ。

2.　調査の概要

2.1　調査の目的と手法

聴解授業は他の授業と比べ学習者全員の理解力に合わせて授業を進めることが極めて難しいと考えられる。その結果、学習者の学習満足度が低くなり、学習意欲も低下してしまう可能性がある。そこで、従来の対面授業で教師の指導の下に行う聴解学習と、e ラーニングでの個人による学習を組み合わせた BL を導入したほうが高い学習効果につながると予想される[1]。

本研究では、日本語の聴解授業でも、上述の先行研究と同様の効果が得られるか検証する。また、ベトナムの日本語学習者の ICT 活用状況で BL を導入する際、どのような困難があるかを明らかにする。まず、本研究では、BL の学習効果を計るために、実践授業の前後にテストを行った。また、実践授業が終わった後、学習者のアンケート調査を実施した。より詳しく調べたい内容についてフォローアップインタビューも行った。

2.2　実践授業のデザイン

対面授業は従来通り大学で一斉に行われる一方、e ラーニングの授業は学習者が各々好きな場所で学習することが出来るようにした。基本的には学習者が e ラーニングで個人学習を行った後、対面授業で疑問を持っている点に関し教師からより詳しく説明してもらいながら、新しい内容を進めるという順番で実施される。授業や学習者及び、e ラーニングと対面授業の概要は以下のとおりである。

- 授業名：聴解 4（中級レベル、聴解練習に特化）、週 2 コマ
- 実施期間: 2018 年 3 月～5 月（合計 8 週間）
- 学習者：日本語専攻の大学 2 年生、88 人
- 学習者の日本語レベル：初中級（日本語能力検定試験 N4～N3 程度）
- テキスト：新毎日の聞き取り 50 日下（凡人社）、N3 能力試験聴解対策問題
- e ラーニング教育システム：Moodle

対面授業：授業の冒頭では、前回の e ラーニングでの内容の復習と質疑応答が行われる。また、学習者の自習では対応しにくい部分、例えば、一度聞いて内容を予測し即時回答するといった聴解のスキルや、キーワードの聞き分け方、音の変化のルール、メモの取り方などについては、対面授業で重点的に指導した。

e ラーニング：対面授業では実施が難しい個人の理解度に沿った学習については e ラーニングで実施した。その際、学習者が完全に「わかる」まで、すなわち全問正解となるまで聴解問題を何回でも聞くことができるように設定した。また、本調査では、Moodle が「学習者中心のシステム」という方向性で開発されたため、より学校教育に向いていると考えらえることから、Moodle を採用することにした。

---

[1] 実際に、日本語教育でも、篠﨑（2010）は e コンテンツを開発したうえで BL の実践を通し、学習者から高い満足度を得られたと述べた。また、外国語教育ではないが、糟谷（2010）では、コンテンツへのアクセス数と試験の得点との関係を調べた。その結果、教材のアクセス数が高い学生ほど試験の得点が高く、試験の得点が低い学生はアクセス数が低いことが確かめられ、システムによる学習効果の向上が検証された。

3.　調査の結果と考察

3.1　アンケートによる学習満足度の調査結果

まず、e ラーニングに対しては、学習者が学習の主導権を持っていることに関する質問項目や、e ラーニングが自身の自学自習能力に与えた影響についての項目について、肯定的な回答が多く得られた。一人で学習を進めることに対し不安という声があまり挙がらず、むしろ自学自習能力が向上したとの回答が得られており、これは e ラーニングのみの授業に比べて、BL が効果的であることを示唆しているといえよう。

また、Moodle のコンテンツに対しては肯定的な回答は合計 60%であった。授業外の内容を加えた内容も、学習者から高く評価されたことが分かった。知的好奇心が旺盛な学習者は、テキストの内容以外についても、学習する機会を求めていると考えられる。

次に、対面授業に対しては、「授業で先生に聞くコツやテクニックを教えてもらった」ことが高く評価されたまた、「友達と一緒に勉強できる」ことも評価されており、対面授業で教師から指導を受けられるのみならず、友達同士の学び合いも重要であると考えられる。e ラーニングだけでは実現が難しいこのような点は、BL において対面授業を組み込むことで補完できると実証できたといえよう。

最後に、BL 全体に対しては肯定的な回答の方が多く見られた。特に、総合評価である「今後の聴解の授業をどのように組み立ててほしいですか」という質問においても、約 80%の学生は「BL 型がいい」と答えており、期待通り、学習者は、BL によって高い学習満足度が得られているといえる。

アンケート結果からは、BL に対する学習満足度が高いことがわかり、学習者自身が感じる学習効果も高まったことが示唆された。

3.2　履修者の得点の分析

3.2.1　試験結果と Moodle の利用状況に関するデータ

本研究に採用した学生の成績は、大学が定めた正式な試験の結果である。事前試験は「聴解 4」授業の中間試験で、事後試験は期末試験である。本研究の分析で主に使用したのは、学習者の事後試験の成績であるため、以下学習者の事後試験の結果を「学習者の成績」と表現する。分析に用いるデータは、Moodle のログから、学習者の Moodle 利用状況を中手地したものである。データの定義は以下である。

① Moodle での出席：どの程度問題を回答したかに関わらず、コンテンツにアクセスした場合、出席 1 回として数えた。

② 総アクセス回数：確認テストを行った回数の合計回数である。回数の数え方は、課題を最後まで終わらせ、採点まで到達した場合に限り 1 回とされる。

③ 確認テスト最高得点：「最高得点」とは、何回テストに挑戦したかに関わらず、その中で一番高い点数である。

学習者全体の平均試験得点と Moodle の利用状況は表 1 でまとめた。

3.2.2　試験結果と Moodle の利用との関係についての分析

表 1　学習者の成績と Moodle の利用状況

	平均値	中央値	最大値	標準偏差
学習者の成績	7.5	7.6	10（点）	1.7
出席回数	10.6	11	15	3.8
総アクセス回数	13.3	14	23（回）	5.4
確認テスト最高得点	80.4	84	100（点）	18

表 2　成績によるグループの Moodle 使用実態

事後成績グループ	平均出席回数	平均総アクセス数	平確認テスト最高得点
A1（低）	8.2	10.5	75.2
A2（中）	11.7	14.6	81.1
A3（高）	12.0	14.7	84.9

表 1 のように、学習者の Moodle の使用状況はばらつきが大きく、積極的に Moodle を使用した学習者もいれば、そうではない学習者も見られた。学習者の Moodle 利用実態と成績の関係についてみてみると、表 2 のように、成績が良いグループほど積極的に Moodle での学習を行っていた傾向が見られる。しかし、各グループの使用率をみると、A1 グループと A2、A3 グループの間にはかなりの差が見られるものの、A2 グループと A3 グループの差はそれほど大きくはない。A2 グループと A3 グループで大きく差がついたのは、確認問題の最高得点である。出席するだけではなく、練習問題を全て正確に回答できるまで、繰り返し聞いてやり直すことが有益であるということが示唆されたと言えるだろう。次に、学習者の試験成績と Moodle でのそれぞれの利用活動との関係を調べるために、事後試験の結果と総アクセス数、確認テスト平均最高得点の関係を重回帰分析を用いて分析した。その結果、表 3 に示した通り、事後試験と Moodle への総アクセス数、確認テスト平均最高得点にはそれぞれ正の相関があることが分かった。

表 3　事後成績に関する重回帰分析の結果

切片	4.928***（0.791）
総アクセス数	0.115** （0.053）
確認問題最高得点	0.020** （0.010）
F 値	5.070***
自由度修正済み決定係数	0.123

（注）括弧内は標準誤差を示す。***、**、*はそれぞれ 1%、5%、10%で有意であることを示す。

この結果から学習者の成績は、総アクセス数や確認問題最高得点と相関があることがわかった。特に重要なことは、授業の内容を全て理解することや、確認テストの満点を目指して何回も繰り返して練習する学習者、いわゆる Moodle 上で積極的に学習した学習者ほど成績も高い傾向があることが明らかになったことである。

しかし、データのバラツキが大きいことから、積極的に練習したものの、成績の改善が見られなかった学習者や、積極的ではなかったが、成績が伸びた学習者も存在する。その学習者は単に試験ができなかっただけなのか、それとも学習過程で何か問題が発生したの

か。その問いを明らかにするため、フォローアップインタビュー調査を実施した。

3.3　フォローアップインタビューの結果と得られる示唆

3.3.1　フォローアップインタビューについて

積極的に Moodle を使わなかったが成績が伸びた学習者と、非常に積極的に Moodle で自習していたが成績の向上が見られなかった学習者の中から代表者を選択した。

表 4　インタビュー協力者の概要

学習者番号	事前成績	事後成績	出席	アクセス総数	確認テスト最高点	宿題提出	Moodle の平均使用時間	パソコン所有
S08	6.8	6.9	5	8	91.7	2	1 時間半以上	あり
S18	5.8	6.0	6	5	81.25	2	1 時間以上	なし
S27	7.5	4.2	14	15	97.2	5	2 時間以上	なし
S61	7.0	5.7	15	22	100	5	1 時間以上	あり
S69	5.0	3.1	13	15	78.6	4	2 時間以上	あり
S88	8.3	6.9	15	18	100	5	2 時間以上	あり

S08 と S18 は Moodle での活動が消極的だったグループに属し、S27、S61、S69、S88 は積極的に Moodle を使用したが、成績が伸びなかったグループである。インタビュー対象者の選択はパソコンの有無だけではなく成績も多様性のある学習者を選ぶようにした。

3.3.2　フォローアップインタビューの結果

3.3.2.1　積極的に Moodle を使用しなかった背景

・パソコンを所有していない： S18 の場合、友達に Moodle の画面を撮影し送ってもらったり、携帯電話に聴解問題のファイルを取り入れて聞くなどの対応をしていた。S18 は「家にパソコンがあれば、もっと積極的に学習できたと思う」とも語っており、パソコンを所有していないことによって、S18 同様に Moodle で積極的に活動できなかった学習者が他にもいると考えられる。

・学習時間のコントロール：パソコンを所有しており、いつもでも勉強できると思っている学生の中には、いつでも勉強できるからこそ後回しにしてしまい、結局時間がなくなり勉強できなくなるという事態が起こっている可能性がある。

・様々な学習方法：学習者の Moodle での学習活動は、Moodle の活動ログ機能から判断している。しかし、S08 は「確認テストの質問だけを閲覧し、その後は答えが分かるまで聞いたが、確認テストは必ずしも解答したわけではない」と回答しており、この学習方法の場合、たとえ実際に真面目に学習したとしても記録には残らない。S08 が授業に全部参加したかどうかは正確には分からないが、「分かるまで聞く」という積極的な学習姿勢は見られた。S08 のような学習者を活動ログの記録だけで評価することは難しいと思われる。

3.3.2.2　積極的に学習したが成績が上がらなかった学習者の評価

このグループの 4 人名は、成績がクラスの上位・中位・下位にそれぞれ属し、パソコン

の有無も分かれている。特性は異なっているが、4 人の中で 3 人が「聴解が一番難しい」、「聴解が一番苦手だ」と語り、自分の聞く力についてあまり自信を持っていないという共通点がある。自身の成績について、学習者は点数が良くなかった原因は自分の能力にあると考えており、今回の BL の影響ではないと述べた。

さらに、成績が下がったのは、BL に問題があるとは考えていないだけではなく、BL によって組み立てた聴解授業を非常に高く評価していることも分かった。どの対象者も BL は本研究の聴解授業に適切な組み合わせだと評価し、特に成績が最も悪かった S69 は「対面授業だけ、e ラーニングだけではない BL は私にとって一番良い授業方法でした」と語っている。聴解が苦手な S69 にとっても BL は学習効果が十分に感じられる学習方法であったと考えられる。

このように、フォローアップインタビューから e ラーニング授業に関する問題が多かった。これらは過去の研究でもよく述べられた e ラーニングの欠点である。今後の BL 授業の効果を向上するためには、学習者の e ラーニング学習のサポート、学習者の自学自習力を育成するための授業設計の改善が必要である。

4. おわりに

本研究は、e ラーニング授業に出席するだけではなく、練習問題を全て正確に回答できるまで積極的に学習する学習者ほど高い成績が得られたことを明らかにした。また成績の改善が見られなかった学習者を含め、聴解授業に BL を運用することによって学習者から高い学習満足度も得られた。

もっとも、本研究では、対面授業の効果・役割・問題点は詳しく分析することができなかった。e ラーニング授業、対面授業のそれぞれの効果、役割そして問題点をより深く分析することを今後の研究課題としたい。

参考文献

Macdonald, J (2008) Blended Learning and Online Tutoring, Gower Publishing,p.2-3.

Michael B. Horn,Heather Staker（2017）『ブレンディッドラーニングの衝撃』（小松健司訳）教育開発研究所.

青木久美子（2012）『e ラーニングの理論と実践』放送大学教育振興会出版, p.14-18.

糟谷咲子（2010）「Moodle の利用による学習効果の評価」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』42, p 107-116.

篠﨑大司（2010）「Moodle を活用した上級日本語聴解 e ラーニングコンテンツの開発と学習者評価－ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて」『別府大学紀要』51, p.1-34

宮地功編著、安達一寿他（2006）『e ラーニングからブレンディッドラーニングへ』共立出版,p.93-121.